The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	認知的視座からの意味論と形而上学 ： 指示参照ファイル理論と認知形而上学
Author(s)	山泉, 実
Citation	日本語・日本文化研究. 2020, 30, p. 29-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

認知的視座からの意味論と形而上学：指示参照ファイル理論と認知形而上学*

山泉　実

本稿では、指示参照ファイル理論（以下、RFT）の基盤（山泉 本巻）を踏まえて、その哲学的基礎を論じる。特に、指示参照ファイル（RF）とそれに対応する世界の対象の関係、及び概念化された世界の探求である認知形而上学（ジャッケンドフ 2012/2019: 29 章、31 章他）を扱う。その世界とは、実在する外部世界ではなく、言語使用者が概念化した世界であり、あえて言うなら、f-心（機能的な心。大部分は意識されない機能的な脳の組織・活動。ジャッケンドフ 2002/2006: 2.1）における空間構造なども含んだ広義の概念部門にある。このように考える理論は、我々が概念化した世界がどのようなつくりをしているのかも探求しなければならない。その営みは認知形而上学と言われる。

1　認知的視座からの意味と指示の理論

1. 1　言語の表す世界はどこにあるのか：概念世界と実在外部世界

言語行動の根本にある心的実在を探求する心理主義の立場（チョムスキー 1965/2017: 37）の言語研究において、言語は言語使用者の f-心にあるとされる。音韻論・統語論は、研究対象が音韻構造・統語構造・およびそれらの関わるインタフェース（言語そのもの、Culicover and Jackendoff 2005: 20）であり、専ら f-心内部の話ということになる。一方、心理主義の意味論を探求するにあたっては、音韻論・統語論にはない概念的困難がある。

そのような立場の意味論は、「言葉の意味は人の内的状態によって説明されると主張する」（仲宗根 2016: 35）という点で、意味論的内在主義（semantic internalism）に立つと言える。RFT の立場もそれに含まれるものの、典型的なものとは重要な点で異なる。通常、内在主義的意味論は、「言葉―言葉関係（word-word relation）を扱う分野」（p. 35）とされる。具体的には、「句や文などの複合表現がどのように合成され、合成の仕方に応じてどのように句や文の意味が変わるのかや、様々な語彙がどのように機能するのか、などの解明」（p. 37）をしようとする。意味論的内在主義は、言語内部にとどまり、「意味論の目的は語と対象の関係を明らかにすることではない」（p. 37）と考えて、「世界が存在することを意味論内部に組み込む必要がないと主張する」（p. 35）。この点で、意味論的外在主義と対立するとされる。

しかし、言語そのものと意味との関係、複合的な意味の内部構造、意味同士の関係だけでなく、言語表現とそれが表す対象の関係をも問題にしなければ、言語記号の振る舞いさえ十分に説明できないと筆者は考えている。言語と対象の関係は、意味論の問題領域に含めずに、ポスト意味論やその一部としての指示論、あるいはメタ意味論で扱うという立場もあり得るが、いずれにせよ、統一的な意味の理論のどこかで扱う必要がある（これらの分野とその違いについては仲宗根 2016 参照）。

では、その対象とはどのようなものと考えたらよいのだろうか。常識的には、実在する外部世界にある対象ということになる。しかし、言語が表す世界は、f-心の概念部門にあり、言語使用者が概念化したものだ（ジャッケンドフ 2002/2006: 10.4）と RFT では考える。このような世界を、実在外部世界と対比して概念世界と呼ぶことにする。こう考えることで、言語と外部世界の間の問題は、言語そのものと世界の間の直接の関係ではなく、言語と概念世界、概念世界と外部世界という二段構えの問題になる。後者は言語の意味論の問題ではなく、認知一般についての問題である（ジャッケンドフ 2012/2019: 202）。本稿では、前者、言語と概念世界の問題だけを扱う。

概念世界には、様々なものが概念化されて存在する。読者が今見ている物や太陽の塔のような物体だけでなく、富士山のような実在外部世界では境界が明確でないもの、シャーロック・ホームズのような架空の登場人物、私が今書き込んでいる原稿のファイル（物理的な実体はどういうものなのかよくわからない）、さらに、「∴」に見て取れる正三角形のような、世界に実在するとは言い難い仮想のモノもある。他にも、ウサイン・ボルトが出した 100m 走の世界記録、この論文に対して私が持っているオーサーシップなどのような物理的実体を伴わない対象がある。さらに、二次元の立方体、猛烈に眠る無色で緑の観念などはどうだろうか。これらは実在し得ない。しかし、これらの表現を理解することはできる（対して「ポヌピのバユパケ」は理解もできない）。理解できるということは、何らかの概念構造をこれらから構築できるということであり、概念化可能ということは概念世界にあるということだ。[1] 自然言語は、存在 exist しないものも存立する be というマイノング的見解を反映している（Moltmann 2019: 26）。

私は今、それらの対象を名詞句という言語表現で指示しようとし、うまくいけば読者はそれを理解した。「読者が今見ている物」、「太陽の塔」という表現で、実在の対象を指示したと理解することはたやすい。しかし、それより後に出てきた対象については、それらが実在外部世界にある対象だと考えると、それらを指示するとはどういうことなのかわからない。これらは、実在外部世界にあるものとして考えようとすると極めて厄介なものになるけれども、どれも言語の上では実在の対象と同じように名詞句に対応し、同じように扱われている。「言語に関する限り、概念化された物理的な事物が外の世界にあろうとなかろうと、指示は同じようにおこなわれる」（ジャッケンドフ 2002/2006: 381）のであるから、言語の働きをよりよく理解するには、指示という行為の日常的な理解から離れる必要がある。名詞句と実在世界の対象の関係ではなく、名詞句と概念（特に RF）の関係として指示を理解する必要があるのである。つまり、「指示」の日常的な概念の分析を行って、我々がこの概念を通常どう理解しているのかを解明しようとするのではなく、扱おうとしている現象を日常的な理解よりも適切に捉えられる理論にふさわしい定義をする必要があるということである（概念分析と理論的定義については、戸田山 2014: 2 章参照）。

既にジャッケンドフ（2002/2006: 357）は、「よくわかっていない「世界の中の事物」など

という概念を捨てて、指示の理論のためには「世界」を言語使用者の心の中に押しこみ、言語と並べる」ことを主張し、指示を伝統的な(1)ではなく、話し手に依存した(2)のように規定している。

(1) 指示の常識的実在主義理論　文脈 C で発せられた、言語 L の句 P は世界（あるいは可能世界）の中の存在物 E を指す。

(2) 指示の概念主義理論　言語 L の話し手 S は、文脈 C で発せられた句 P を、[S によって概念化された世界]の中の存在物 E を指すと判断する。（pp. 357–358、[ ]は原文）

RFT は、言語は OIC の道具であると考えるため、言語の使用においては話し手が想定する聞き手を基本に考える。[2] そのため、(2)に聞き手を入れて次のように改訂する。

(3) 指示の OIC 的概念主義理論　言語 L の聞き手 H は、文脈 C で言語 L の話し手 S から発せられた句 P を、[S が想定した H によって概念化された世界]の中の存在物 E を指すと判断する。（このとき、H は S が E を指示したと判断する。）

なお、「判断する」とは、意識的な判断だけでなく、通常の会話の条件下での適切な使用、通常の会話の条件下での理解の証拠、心理実験での振る舞い等々、言語使用に関する様々な行為の代用語であり（p. 358）、何をするにせよ存在物 E、すなわち E の RF の使用を伴う。

S が H に E を指示するには、E が H によって RF として概念化されていて、そのことを S が想定していることが必要で、E が外部世界に実在するかどうかは全く関係ない。このような修正を伴いつつ、RFT はジャッケンドフの次の見解に同意する。

> 概念構造が世界の中の何かの記号だとか表示だとかということ、つまり、何かを意味するのだということを明確に否定しないといけない。むしろ、概念構造こそが意味なのだと言いたい。概念構造は、推論や判断を助けるなど、まさに意味がするはずのことをするのである。すると、言語が意味をもつのは、概念構造と結びつくからだということになる。（pp. 360–361）

言語の語る世界は概念部門にあり、その世界の中に構成要素として対象がある。RF は概念構造の構造体だから、その対象の記号や表象だと考える必要はなく、これまで RF と呼んできたものは概念世界の対象であると考えてよいだろう。少なくとも指されるものに限れば RF と同一視してよいだろう。そう考えないと概念構造に重複が生じてしまう。[3] RF が概念世界の対象でそれが即ち名詞句の意味であると考えるのである。

以上のように考えることで、フレーゲ（1892/2013）の意義/sense/Sinn とイミ/reference/Bedeutung という 2 つのレベルで捉えられてきたことを、この区別なしに 1 つのレベルで捉えられるようになる。認知的 OIC の視座を採る RFT は、意味を意義とイミの 2 レベルに分けることを否定する。[4] RFT は、名詞句の意味は記述か対象かという二分法を無効化する（田中太一、p.c.）。なお、概念世界の存在物が全て RF であるわけではないだろう。たとえば、「太郎が花子をうっかり殴った」の「うっかり」は概念世界の何かを表している

ことは間違いない。ただそれは、概念世界の太郎・花子と同じような RF として概念化されるような地位の存在物として概念世界に存在するとは考えにくい。

世界が f-心にあるとするなら、ジャッケンドフ（2002/2006: 26）が f-心にあると措定されるものを「表象」のような志向的な用語で呼ぶべきではないと言っていることが理解できよう。「表示 representation」「記号」「情報」のような「志向性の臭いの強い用語」（p. 23）は避けて、統語表示、意味表示などは「認知構造 cognitive structure のモデル」、NP のようなその部分は、「認知実体 cognitive entity」または、「構造要素 structural element」と呼ばれている。表示されるとされる実在外部世界を中心に据えるのではなく、概念世界・概念部門を含む f-心を中心に据えるなら、そうするべきだろう。RFT は、実在外部世界の対象があるからそれに対応する RF があるとか、対象が概念化に先立って所与のものとして独立してあるとは考えない。本書の立場と整合するのは、RF はそれに対応する対象を対象たらしめるものであるとする逆方向の考えである。RF を何に対応させるかは、結局は捉え方次第である。たとえば、砂粒の 1 粒 1 粒、キーボードのキー1 つ 1 つに注意を向けなければ、それぞれへの RF はないだろう。つまり、心的表象と呼ばれてきたものは、心の外にあるものの代わり（表象）として考えるのではなく、主従関係を逆にして捉えるべきであるということである。これはカントの「コペルニクス的転回」（『純粋理性批判』第 2 版序文）と軌を一にする。対象の同一性も RF の ID が同一かどうか次第である。

1. 2　認知的視座と日常的視座

既に明らかなように RFT は日常的なものの見方とはかなり異なる見方をする。ものの見方のことを視座（perspective、ジャッケンドフ 2012/2019 では「視点」と訳されている）という。ここで、RFT のものの見方に慣れてもらうため、ジャッケンドフ（2012/2019）の訳者後書き（大部分筆者が書いた）に基づいて、言語の表す世界は概念世界であるとする認知的視座を、言語の表す世界は実在外部世界であるとする日常的視座など他の視座と対比しながらまとめておきたい。[5]

我々が何かについて考えるとき、必ず何らかの視座を採っている。普段のものの見方を日常的視座といい、これは特定の知識体系を勉強しなくても我々が自然と身につけられるものである。例えば、日没という現象（ジャッケンドフ 2012/2019：4 章）は、日常的視座からは太陽が地平線の下に沈んでいくことである。一方、天文学的視座からは、地球が自転するにつれて、太陽光が観測する人のいるところに徐々に届かなくなることである。この視座からは、太陽は海に投げ込まれたボウリング球のように沈むわけではない。視座によって太陽が沈むかどうかが異なり、どちらかだけが絶対的に正しいということはない。天文学的視座からは太陽は沈んでいないのに、日常的視座からは太陽が沈んでいく（ように見える）のはどうしてか、と問うた場合、1 つの説明は以下のものである。観測者と太陽の位置関係の特定の変化の仕方、および、観測者は自分が動いているようには感じないことから、観測者

には太陽が下に動いている、すなわち沈んでいるように見える。この説明は、観測者の（必ずしも意識されていない）心のはたらきから説明したものであるため、認知的視座（の 1 つ）からのものであるといえる。

学問的な議論でなくとも、視座の転換は起こり得る。「紙幣も学位記もただの紙切れだ！トイレットペーパーの方がまだ役に立つ！」とか、「棒（バット）で球（ボール）を打って何が楽しいんだ！」という人は、日常的視座から脱して、それに含まれる物や行為に対する様々な意味付け・価値付けのない一種の唯物論的視座から発言しているのである（意味や価値や自由意志を唯物論的視座に書き込もうとする試みは戸田山 2014 参照）。日常的視座は、ジャッケンドフが次のようにまとめている通りのものである。

> 日常的な視点とは、私たちが日々の生活を送るためのものである。それは自然が私たちに備え付けてくれたものだと思われる。私たちは労力なしに世界を経験する。それは物や人、単語や文、進行中の出来事、他のことを引き起こすものごと、自らの自由意志によって行動している人たちであふれた世界だ。文は世界との対応の仕方にもとづいて真か偽となる。また私たちはイメージや思考という精神生活も経験する。思考というものを吟味すれば、それは頭の中の文だということになり、ここから私たちの思考は内的言語なのだと結論できるかもしれない。（pp. 306–307）

「文は」以下、言語学的な主張が含まれているが、認知的視座に立つ RFT はこれらの主張に与しないことに注意されたい。「自然が私たちに備え付けてくれたもの」というのは、つまり、進化上の適応の結果であるということである。この視座においては、たとえばものが見えるというのは、実在外部世界にものがあって、それがそのまま（何も介さずに）見えるというだけのことである（同書 21 章、25 章）。日常生活は日常的視座でほとんど問題なく送れるのだが、宇宙からの地球や太陽の観測、錯視画像との遭遇といった非日常的な経験、あるいは、理性による非日常的な問い—たとえば「何が太陽を巡らせているのか」（p. 307）—には、日常的視座の手に負えないものが多々ある。こういったことの理解を諦めるのでなければ、「戦車を駆って太陽を牽引する神」（p. 307）や錯視を起こしている悪魔などの超自然的な存在を導入して日常的視座を維持しようとすることになるか、天文学的視座や認知的視座など他の視座の出番になる。

認知的視座とは、ものが見えるというような人間の心が関わる現象を人間の心に即して、頭の中で起こっていることとして理解しようとする見方である。たとえば、光が目から入ってきて網膜に届いたら、頭は何をするかというと、奥行き・輪郭・色などの観点から分析し、視野に欠損部分があったら周囲の見え方から補い、記憶とのパターンマッチングを行い……等々の結果、「目からの入力と視覚表層の間の結びつきの存在」（p. 181）があるために、現実のものが現実のものとして見えるのだ……というように理解することである。日常的視座においても心はあるとされるが、多くの場合、意識的なものだけ（あるいはそれに加えてフロイト的な無意識の部分）が心とみなされ、それは f-心とは異なるものである。人間の

頭で起こっていることはソフトウェアの視点からもハードウェアの視点からも考えられるが、RFT の採用する（狭義の）認知的視座は、ソフトウェアの視点から理解しようとするもので、この視座を取ると、錯視のような日常的視座の手に負えない現象も説明できる可能性が開ける。なお、ハードウェアの視点から理解しようとするものの見方は神経的視座（neural perspective）という。[6] たとえば、ものを見る場合は、目から入ってきて網膜に届いた光が信号に変換されて視神経から第一次視覚野に入り……のような考え方をする。

注意すべきことに、認知的視座も日常的視座も万人に共通するものが 1 つだけあるわけではない（ある呼び名が 1 つの確定したものとしか結びついていないと考えるのも日常的視座の見方かもしれない。「同一の語を使うと、我々は同一の概念を扱っていると考えたくなる」（Jackendoff 1996: 207、筆者訳））。どちらの視座にも個人差、および一個人の中のバリエーションがあり得る。科学や哲学に馴染みのある現代人は、1 万年前の人（進化心理学的には現代人とほぼ同じ心の素質を持って生まれたとされる。ミラー&カナザワ 2007/2019）とは幾分異なる日常的視座を持っているかもしれない。認知的視座にもデカルト的なもの（ジャッケンドフ 2012/2019: 31 章）のようなバリエーションがある。また、認知科学の知識を更新することによって変わることもある。さらに、複数の視座を持ち、それを俯瞰した視座（perspectival perspective）をも身につけられることも、人間のもしかしたら固有の認知能力である（同書 43 章）。その能力を探求するにあたっては、視座の同定、同一性、分類、視座の間の関係（上位―下位関係や全体―部分関係はあるのだろうか？）といった形而上学的問題が待ち構えていることになるが、ここでは次の点以外深入りしない。

認知的視座と日常的視座は少なくとも 2 通りの関係を結ぶ。1 つ目は両者が言語・意味・指示などについて提供する説明における競合関係である（1.3.1 節参照）。2 つ目は前者が後者を説明するという説明―被説明の関係である。つまり、我々の普段のものの見方を、f-心がどのように働いているのかから解明するという関係である。たとえば、日常的視座から物があると感じられるのは、認知的視点からは、「特定の空間構造が RF および何らかの特性タグと結びついたとき」（p. 308）ということになる。説明―被説明の関係はこの 2 つの視座の間だけに見られるのではない。脳神経が RF やその内部のデータ構造をどのように実装しているかがわかれば、認知的視座を神経的視座によって説明したことになる。また、脳神経回路の物理・化学的メカニズムが分かれば、還元という仕方で神経的視座を物理・化学的視座から説明したことになる（p. 308）。物理・科学的視座が一番根底にあり、それだけあれば全てが説明できるとまで考える還元主義者もいるだろうが、筆者はそうは考えない。視座のレベルが上がることで、下のレベルには見られない現象―生命、意識、意味、コミュニケーションはその候補である―が創発してくるからである（マンフォード 2012/2017: 3 章）。そのため、「それぞれの視点は強みと弱みをもっており、いずれも私たちがものごとを理解するときに独自の役割をもって寄与し、どれ一つとして他のどれかに完全に還元することはできない」（ジャッケンドフ 2012/2019: 306）。つまり、理解したい現象によって適切な視座

が変わってくるということである（これとは異なり、進化の観点を入れることで唯物論的視座に全てを書き込もうという立場は戸田山 2014 を参照）。RFT は、言語、意味、指示を考える際にも、OIC の観点を取り入れつつ認知的視座を貫徹しようとする。

1.3　言語・意味・指示への視座

1.3.1　意味の無意識仮説と意味研究で認知的視座を貫徹するのが難しい 5 つの理由

ジャッケンドフ（2012/2017）は言語についての日常的視座と認知的視座を、それぞれチョムスキーの「E 言語」（外在言語）と「I 言語」（内在言語）におおよそ対応すると述べている（p. 19）。これらの概念に馴染みのない読者のためにも以下、敷衍していく。

言語研究をしていない人の多くは、日本語のような個別言語を「現実世界に存在する統一された構造物」で、「使い方を身につければ一種の道具のように使うことができる」ようになるもの（p. 16）とでも捉えているのではないか。日常的視座から見た個別言語はこのようなもので、この考えを学問的に突き詰めた一つの到達先が言語共同体に共有された慣習の体系のような、ソシュール（1916/2016）のラングに代表される言語観であろう。哲学者の多くも、日常的視座そのものではないが、それを研ぎ澄ました視座から、「どの話者からも独立した抽象的な存在物」（ジャッケンドフ 2012/2017: 17）と言語をみなしている。分析的言語哲学の礎を築いたフレーゲや初期生成言語学の意味論に大きな貢献をしたカッツがそう考える哲学者の代表として挙げられている（pp. 19–20）。この言語観は言語研究に大きな影響力を持っている。

しかし、チョムスキー革命以降、広義の文法（音韻論、形態統語論、意味論）の研究者の多く―ジャッケンドフによると「言語学者の圧倒的大多数」（p. 17）―は、日常的視座をとらず、認知的視座から言語を研究している（ことになっている）。認知言語学者は I 言語を研究しているとは言わないだろうけれども、言語使用者の頭の中にあるシステムがどのようなものかを（も）探求しているという点では認知的視座を取っている。この視座からは、日本語のような個別言語は、「すべての話者の中にあるすべての体系の近似値、平均値、もしくは理想化したもの」（p. 17）ということになる。言語に対する認知的視座は、チョムスキー革命以後、始めは統語論、やがて音韻論と意味論でも一般的になっていった。

認知的視座が言語の研究において一般的になったとはいえ、殊に意味の研究でそれを貫徹することは、統語論・音韻論の研究の場合ほど容易ではない。筆者には多くの理由が考えつく。第一に、言語学は少なくとも日本において文系の学問であるためか、視座に無自覚なまま研究が行われがちである。そうなると、普段の視座である日常的視座が知らぬ間に入り込みやすい。方法論の確立した理系の学問であれば、視座に無自覚でもパラダイム内での研究が大きな問題なく行われると筆者は想像している。

第二に、前述の哲学の影響がある。日常的視座からの哲学的言語研究が言語学の意味論・語用論の研究に多大な影響を与えてきたことは明らかである。それにおいては、意味は外部

世界（実在するとみなされないことが多い可能世界も含む）にあるとされることが多い。例えば、「水たまり」（4 章）という語の意味はなんだろうかと日常的視座から考えると、外部世界にある水たまりの集合（あるいはそれが関わる関数）だというような考えになるのはおかしなことではない。（集合の外延そのものを頭に入れるわけにはいかないため、認知的視座においてはこの見解を真に受けることは困難である。）哲学において、実在しないものの表現（「シャーロック・ホームズ」、「ユニコーン」、「現在のフランス王」（ラッセル 1905/2013）など）や外部世界に必ずしも対応しない信念の表現（例 実際には水を飲んでいる「マティーニを飲んでいる男」ドネラン 1966/2013）の意味が盛んに議論されてきたのは、日常的視座ではそれらが扱いにくいからに他ならない。視座は通常、それ自体が議論の対象とならず、研究の背景をなしている。そのため、認知的視座に立つ言語学者が日常的視座に立つ哲学の先行研究を参照する際、彼我の視座の差に気付かないままでいると日常的視座が混じりやすい。

第三に、意味についての理論はどこかで世界と関わらなければならないということがある。この観点からは、外部世界に意味があると考える日常的視座はこの上なくとっつきやすい。一方、認知的視座は意味が心にあると考えるため、言語表現と心にある意味との関係を考えるのに加えて、心にある意味と外部世界との関係も考えなければならず、問題が複雑になる。この点について筆者は、心にある意味と外部世界との関係は、前述の通り言語の問題ではなく認知一般についての問題で、本書の射程を超えると考えている。ジャッケンドフが以下のように述べる通りである。

> 言語表現がいかにして「世界に関する」ものたりうるのかという難問は、正確には言語についての難問ではない[…]。むしろ認知についての難問なのだ――人の頭にある概念構造、空間構造・発音・視覚表層・特性タグが、どうやって言葉と物で満ちている外部世界の経験となっていくのか？[…]私たちは心的構造に導かれて世界を経験する。そのような心的構造をひとたび理解したら、今度はそこに言語を結びつけることはさほど困難ではない。（p. 202、強調原文）

実在外部世界と言語のつながりを考えるには、外部世界と f-心のインタフェースである知覚を本格的に扱わなければどうにもならない。知覚を f-心の機能として扱って、知覚の認知科学と接続する必要があるが、それは本書の射程を大きく超える（p. 164 参照）。

第四に、意味とはどのようなものかについてあまり合意が無いだけでなく、言語学においては、そのような哲学的議論が往々にして忌避され、正面切って議論されることが少ないということが挙げられる。認知的視座においては、普通、心にある概念が意味であるとされる（概念を処理する手続きも関連性理論では意味として認められている Wilson and Sperber 1993/2012）。しかし、概念とは何かについても意見の一致がなく、言語学において正面切って議論されることはさらに少ない。[7] 認知的視座に立つ言語学者であっても、意味とは何か―これは言語学的というよりは哲学的な問いとみなされる―を棚上げにしたまま具体的な

言語表現の意味分析をしている者が少なくない。ここにも意味・概念とは何かを長年議論してきた哲学の日常的視座が忍び込む隙がある。なお、意味とは何かを棚上げした研究にとっての意味とは、結局論文を書いている言語によるパラフレーズや、それを〈 〉に入れたものや、認知文法などの図[○ → ○のようなもの]以上のものではないことが多い。そうなることには次に紹介する意味の無意識仮説も関係しているだろう。

幾多の困難に負けずに認知的視座から意味を扱おうとする者は、まず、普段は背景に退いている視座について自覚的になり、意味についての自他の言説がどのような視座に立ったものかを吟味しなければならない。それに加えて、認知的視座の意味研究者が真剣に検討しなければならないものに、意味の無意識仮説（ジャッケンドフ 2012/2019）がある。それによると、認知的視座における意味とは、基本的には概念部門にある構造化された概念であるものの、それ自体は意識できるものではない。我々が意識できるのは、それに結びついた発音と、発音が意味に結びついているか否かといった、認知的な“タグ”の有無として捉えられるような単純なことだけである。意味が意識できるように思われるとしたら、意識可能な発音を取っ手（ハンドル）としてそれに結びついた概念を操作することができるからである。驚くなかれ、言語表現を構成する音韻構造・統語構造・意味構造のうち、「思考の経験と最も近似するのは音韻論」（p. 138）である。意味は意識できず、イメージされた発音は意識できるのなら、「意識的な思考の主要な認知的相関物」（p. 138）は後者のはずだからである。

概念構造は意識できない一方、実在外部世界は意識できる。意味が意識できないとは思いもせずに意味を探し求めたら、意識できる実在外部世界（や認知文法の図）に辿り着いてそこに安住するのは自然なことであろう。これが意味の研究において認知的視座を貫徹することが困難である第 5 の理由である。

認知的視座に立ち続ける者は、意味が意識できない以上、RF のような見たことも聞いたこともないものを意味として措定しながら意味を探求していく必要がある。概念構造について直接問題となるのはその内部構造（どのような要素がどのように組み合わさっているか）や他の部門の構造との関係といった形式的特徴であり、この点は統語構造・音韻構造とまったく並行的である（Jackendoff 1992: 30）。統語論や音韻論では、それ自体意識できない統語構造や音韻素性を措定することに抵抗を覚えるものは少ない（移動や統語派生は別である）。意味論において、理論的構築物を措定することに違和感があったとしても、基本的に慣れの問題であろう。

1. 3. 2　認知的視座からの真と指示

文の意味である構造化された概念そのものは意識できないからといって、言語学における意味の研究が被験者の行動を測定するような実験的手法でも用いない限り行えないわけではない。実験的手法を用いない言語学的意味論研究は、どれだけ成功したかはともかく、長きに渡ってなされてきた。それが可能であるのは、2 つの文がそれぞれ表す構造化された概念を比較した結果―含意関係にあるか否かなど―も意識できるからである。ただし、比較

された両者そのものや比較のプロセス自体は意識できない。このことは、意識できる発音に関して 2 つの語が韻を踏むかどうかという比較は、プロセスも結果も意識できることと対照的である（Jackendoff 1996: 8.4）。

文の真偽も、認知的視座からは心における比較の問題である。日常的視座における文の真偽は、言語使用者から切り離された文と、同じく言語使用者から切り離された世界が対応しているかどうかの問題で、文の真理条件を世界が満たしていれば真、そうでなければ偽である（ジャッケンドフ 2012/2019: 32–33 章）。一方、認知的視座からは、言語使用者がある文の真偽を判断するときに、その f-心で何が起こっているかが問題になる。これは、いたずらに問題を複雑にしているわけではない。そもそも、文と世界という全く異なるものが対応したりしなかったりするということは何らかの説明を要するからである。日常的視座における文の真理条件にあたるものは、言語使用者が文の概念構造へのインタフェース制約を手がかりに、語用論的拡充をしつつ構築した広義の概念構造（空間構造を含む）であり、これが言語使用者の概念世界と照らし合わされて真偽が判断される。日常的視座の「世界」にあたるもののソースには何種類かあり（34 章）、真偽判断の最中の知覚に由来するかもしれない（「机の上に猫が寝ていますね」「はい」）。過去の知覚経験に由来することもある（「昨日、猫を見ましたね」「はい」）。推論の結果に由来することもある（「昨日、あなたの携帯電話は東京にありましたね」「ずっと大阪にありましたから、違います」）。他人から聞いたことに由来することもある（「あなたは 7 月 5 日に生まれましたね」「はい」）。それらのソースと文に由来する概念構造を比較して、合っているという感覚があれば真、違うという感覚があれば偽と判断される。勿論、両者には詳細度などの差があるから、単純に白か黒かの判断をするだけではなく、厳密にはもっと複雑なはずである。また、文の概念構造に対して比べられる「世界」のソースがない場合は、信念や情報源の信頼性に基づいて、発話を真として受け入れるか、それとも情報源はそう信じているとだけ受け取るかを決める処理が行われる（「RFT は取るに足る理論ですね」「1. はい、2. 筆者がそう信じているだけ」）。

名詞句の指示についても同様の処理がある（ジャッケンドフ 2002/2006: 10.10）。日常的視座における指示は、名詞句とその指示対象となり得る世界の中の存在物（entity）の間の関係で、前者が後者によって充足（satisfy）されると指示がなされる（充足というと、言語哲学に詳しい読者は記述を満たすかどうかだけの問題と考えるかもしれないが、そういうわけではない）。ここでも、世界の中の存在物と言語表現という全く異なるものの間に関係が成り立つことは何らかの説明を要し、認知的視座の出番となる。認知的視座において、存在物は概念世界に RF として存在する。名詞句も厳密には概念世界に存在し、その RF を措定すべきだが、本稿では煩雑になるのを避けるため、単に「名詞句に RF が対応する」という言い方をする。RF は発話の最中の知覚に由来するかもしれない（「<u>机の上に寝ている猫</u>を見ろ」）。過去の知覚経験に由来することもある（「<u>昨日玄関に落ちていた鍵</u>はどこにやった？」）。一種の推論[8]の結果に由来することもある（「<u>コピー用紙</u>を全部使ってしまったよう

だ」)。他人から聞いたことに由来する場合もある（「この iPhone はバッテリー（見たことはない）がダメになったみたいだ」)。また、名詞句に対応させる「世界」の対象が知識にない場合は、RF を仕立てることになる(「昨日、イリジウムの正二十面体をもらったんですよ」)。その場合、仕立てる人の信念や情報源の信頼性は RF を作るか否かを左右しないものの、RF の位置付け（誰の心のどの世界のどの様態にその RF があるとするか）が異なってくる。デフォルトでは話し手が想定した聞き手の心の現実世界の実態にあるものとして RF を仕立てることになる。「一次元の立方体」のような矛盾する性質を持っている対象でも、RT が仕立てられないわけではなく、矛盾した性質を併せ持つ RF が、多くの場合は現実の実態以外のものとして仕立てられることになる。

2　認知形而上学

認知的視座においては、言語が直接的に表すのは実在外部世界ではなく言語使用者の概念的世界にある対象であった。では、その概念世界とは詳しくはどのようなものか。このような問いが言語学における意味論の研究で問われることは少ない。「大部分の科学者たちが、ほとんどすべての時間を注いでいる通常科学の研究は、世界はいかなるものかを科学者集団はすでに知っているという仮定の上に立っている」（クーン 1970/1971: 6）からである。しかし、このような問いは、言語の意味を研究するにあたって、特に RFT のような理論を構築する際には避けることができない。世界はどのようなものかを探求する哲学の分野は形而上学と言われる。概念世界がどのようなものかを探求するのが認知形而上学である（ジャッケンドフ 2012/2019: 29 章・31 章。Mercier and Sperber 2017: 6 章も参照)。認知形而上学においては、概念世界にどのような類のものが存在するのか、人（person）とはどのようなものか、人やその他の存在物の同一性はどのように担保されるのかといった問題が扱われる。ジャッケンドフ（2012/2019）では、認知形而上学の具体的な議論が中心である。そこで以下では、まず認知形而上学が概念主義的意味論・RFT に必要であることを述べ、それに続いて認知形而上学がどのような営みかについて本稿で考察を加える。

2.1　形而上学と意味論の関係

言語の意味をある視座から探求する場合、同じ視座に立った形而上学をも車の両輪のように一緒に進めていかなければならない。言語学でそのような主張がされることは多くないと思われるが、言語哲学の文脈において山田（2002）が意味論とモデルの関係について以下のように語っている。

> 未解釈の記号言語を扱うのではなく、自然言語の意味の理論であろうとする限り、モデルの集まりの全体が、少なくとも自然言語によって表現可能な限りでの、世界のあり方の多様な可能性（世界の可能なあり方の多様性）をカバーできる豊かさをもつことは必要である。このような見方のもとでは、モデル論的意味論は、ある興味深い仕

方で経験的な理論としての側面をもつことになる。そこでは、自然言語が表現できる世界の可能なあり方を再現するために必要とされる概念的資源が、どれだけのものになるかという問いが問われうることになるからである。この問いは、自然言語の意味を特徴づけるためにどれだけの概念的資源が必要となるかという、自然言語に関する経験的な問いでもあることは言うまでもない。（p. 190）

山田は形式的なアプローチの意味論に関してこのように述べているが、RFT・認知形而上学についても全く同様である。山田の言を臆面もなく借りると、次のように言える。“認知形而上学が記述する世界が、少なくとも自然言語によって表現可能な限りでの、概念化された世界の在り方をカバーできる豊かさを持つことは必要である。このような見方のもとでは、認知形而上学は、ある興味深い仕方で経験的な理論としての側面をもつことになる。そこでは、自然言語が表現できる概念化された世界の可能なあり方を再現するために必要とされる概念的資源が、どれだけのものになるかという問いが問われうることになるからである。（以下同文）”RFT にとって認知形而上学が必要とされる所以である。

より一般的な話として、鈴木他（2014）は言語哲学と形而上学は補完関係にあり、後者は前者を基礎付けるという関係にあると述べている。

言語哲学の主要な目的は、言語にまつわる様々な現象のメカニズムを解明し、それらについて説明を与えることである。だが、言語的現象についての説明は、他の種類の説明と同様、何らかの存在者やプロセスを措定したうえでなされる。そしてここに、形而上学のなすべき仕事がある。というのも、そうした措定物の本性や存在論的身分についての問い―たとえば、その措定物は、それ自身世界の基礎的な構成要素なのか、それとも、説明の上では言及するのが便利だが最終的には他の何かに還元されるものなのか、といった問い―は、まさに形而上学の問題だからだ。（p. 261）

もっとも、次のように述べる鈴木他の念頭にあるのは、実在世界とそれを意味するとされる言語であろう。

形而上学においては、言語的現象についての説明でもち出される存在者や関係があらためて主題化され、それらが実在世界においてどのような身分をもつのかが吟味される。こうした作業は、様々な言語現象を、実在世界のより一般的な枠組みのうちに位置づけ、その正確な居場所を見定める試みだと言えるだろう。（pp. 261–262）

しかし、ここで述べられている意味論・言語哲学と形而上学の関係は、概念主義的意味論と認知形而上学においても同様に成り立つ。[9] RFT は名詞句を主に扱う理論であるため、対象の同一性や存在論的範疇といったような主題をめぐる認知形而上学がまず必要になる。[10]

概念主義的意味論・RFT が認知形而上学を一方的に必要とするだけではない。鈴木他は形而上学が言語哲学に基礎を与えるという方向性とはいわば逆の関係についても述べている。それは、「形而上学はどのような方法で進められるべきか」（p. 262）というメタ形而上学的問題に関するものである。その背景には、言語論的展開を構成した「哲学的な問題の発

生には言語が深く関わっており、それゆえ、哲学的問題の解決のためには言語に関する考察を経由することが不可欠だ、という認識」（p.262）がある。このため、哲学の方法として言語の分析を行う哲学者が現代において多数現れ、心・知識・価値などの問題に関してだけでなく、形而上学的問題を考察するにあたっても、同様の方法を取る者がいる（p. 263）。そうした哲学者にとっては、「実在世界の基礎的なあり方を明らかにするという形而上学の企ては、言語のはたらきを明らかにするという言語哲学の企てから独立に行なわれうるものではない」（p. 263）。ここにおいても問題とされるのは実在世界だが、概念世界が対象となっても同様のことが言える。つまり、概念世界のあり方を明らかにするという認知形而上学の企ては、言語のはたらきを明らかにする RFT のような企てから独立に行うことはできない。

「哲学的な問題の発生には言語が深く関わっており、それゆえ、哲学的問題の解決のためには言語に関する考察を経由することが不可欠だ、という認識」（p.262）は今日の哲学、特に分析哲学で広く共有されている（青山 2012/2014: 1 章）。この認識と概念主義的意味観を組み合わせると、認知的視座を取る立場からは、言語の表す世界とはどのようなものか、どのような視座から言語は世界を描いているのか、という言語の視座に関する考察を経由することが哲学的問題の解決には不可欠であるということになる。これに関連してジャッケンドフ（2012/2019: 244）は、真理に関する哲学的問題が生じる理由の一部として、日常的視座を当然のこととすることと、「問題含みの例に直面した際にしなければならないことは、この視点を研ぎ澄ますことだけであるかのように振る舞う」ことを挙げている（認知的視座からの真理観は本稿 1.3.2 参照）。視座に自覚的でありつつ、言語について考察することが問題の解決を促す（山泉 投稿中）。逆に視座に無自覚であることは、他の形而上学的問題も引き起こす。

2. 2　認知形而上学とはどのようなものか

2. 2. 1　一般認知形而上学と特殊認知形而上学

世界の概念化の多様性に応じて、認知形而上学の可能性も多様である。その多様性を前提として、認知形而上学にも中世形而上学と同様に一般と特殊の区別を考えることができる。一般認知形而上学は世界の概念化の可能性―たとえば、RF の可能なデータ構造はどのようなものか―の探求を行う。一般認知形而上学と特殊認知形而上学の対比は、マイノング（1904/1930）の「認識に関わる一切の対象を包括的に探求する学」としての対象論と「存在するものについての学」である形而上学という対比（鈴木他 2014: 242）にも通じるものがある。n 次元の空間ような普段のものの見方には出てこない存在物を扱う数学の研究は、一般認知形而上学的探求の一環と捉えることもできるだろう。一方、世界の概念化の可能性のうち、何らかの場合に採用されるものの探求が特殊認知形而上学である。当然、それには視座の違いに対応するバリエーションがある。たとえば、日常的視座では人（person）は心と体から成る（ジャッケンドフ 2012/2019: 31 章）が、哲学的立場によってはそうではない。

日常言語を扱う意味論と対になる特殊認知形而上学が主に解明することになるのは、平生の日常的視座において単に世界と捉えられているものである。

2.2.2　日常的視座を扱う特殊認知形而上学の特徴

日常的視座を扱う特殊認知形而上学と日常的視座を前提とする通常の形而上学は多くの点で異なるものである。まず、学説の評価の基準が異なる。日常的視座の特殊認知形而上学の評価は、日常的視座をどれだけ忠実に捉えているかによって評価されることになる。日常的視座からの世界の捉え方に一貫性がないのであれば、そのようなものとして世界を記述することになる。普通の形而上学において最も重視されるのは、形而上学理論の完成度であり、常識との整合性はそれより下に置かれ、常識と形而上学理論が衝突したときに、道を譲るのは通常前者であろう。

> 私たちが当然正しいと考えていることと矛盾しないことは、様々な形而上学的立場が目指すべき大事な目標である。しかし他方で、ときには哲学的解答ではなく、常識のほうが修正されることもある。たとえば、常識が互いに不整合であることが示されたり、常識が他の知見（たとえば、科学的知見）と衝突していることが判明したりしたときには、形而上学的立場ではなく常識の方が改められることがある。（鈴木他 2014: 16）

日常的視座の認知形而上学においては、常識は研究対象であるから、それに一貫性がないとしても改めることはない。認知形而上学は記述的（descriptive）であり、改訂的（revisionary）ではない。

方法論の面でも、日常的視座の認知形而上学とそれ以外の形而上学は異なることになるだろう（形而上学の方法論については、Ivanova and Farr 2020 などを参照）。認知形而上学の最も強力な研究手法の一つが言語を観察することである。たとえばジャッケンドフ（2012/2019）は、指示詞でタイプ・音・場所・方向・動作・長さ・量を物体と同様に指示できることを根拠に、我々はこういった種類の存在物を認識していて、これらは概念構造において RF を与えられ得ると主張している（p. 214）。通常の形而上学では、指示詞の用法を観察するだけで、これらの存在が認められることはない。直観をどう扱うかについても認知形而上学には特徴がある。たとえば、形而上学における思考実験―人の分裂や記憶交換装置の使用―を用いた人の同一性の議論（ケーガン 2012/2019：第 6・7 講など）を見ると、形而上学の理論・仮説を選ぶにあたって、直観は控え目に言ってもかなり重視されている（Ivanova and Farr 2020: 451 も参照）。しかし、導き手とみなされている直観は、そもそも思考実験に出てくるような特殊な状況で直観は頼りになるのだろうか。日常的視座は進化上の適応の産物であり、理性で一貫して世界を捉えるためのものではない。直観も通常の環境下における進化上の適応の産物（Mercier and Sperber 2017）である。そのため、人の分裂や記憶交換装置の使用のような特殊な状況では明確な直観的判断ができず、自信をもって判

断が下せないことがあるのは不思議ではない。

そのような特殊な場合をきれいに扱えないことは、日常的視座の特殊認知形而上学にとってそれ自体問題となるものではない。日常的視座の特殊認知形而上学にとっては、直観は研究対象の側に属する。我々が世界を経験・創造する方法の一部である直観（Scholl 2007: 582）が、特殊な状況において働かないということそれ自体がデータとなる（田中太一、p.c.）。Scholl（2007: 5.3）が強調するように、そのような状況は、人間が錯視を起こす特殊な環境のようなものである。錯視の見え方は人間の視覚を解明するのには大いに役に立っても、外界そのものの解明には当てにならない。同様に、形而上学の思考実験で想定されるような特殊な状況における直観的判断も、概念世界やそれを作る人間の認知の解明には大いに参考になっても、実在世界の解明には当てにならないのではないか。また、人によって直観的判断が分かれる場合もある。[11] その場合、理想的には、各人が重視していることを分析し、直観的判断を構成要素に分解できれば、我々の概念世界を解明するヒントとなる。

科学の知見と形而上学の関係は、よく議論されることだが、認知形而上学については少なくとも次のようなことが言えるだろう。日常的視座を捉えるためには、言語データや心理実験の結果などの経験的根拠が説を支える強い証拠になり得る。この点で、「科学は、理論が観察された事実と適合することを求めるのに対して、形而上学のデータは観察に基づくものではない」というマンフォード（2012/2017: 171）の対比は認知形而上学にはあてはまらない。[12] また、時間や空間とは何かという形而上学的問題に答えるにあたって、現代の物理学についての知見は必要不可欠だと言われている（鈴木他 2014: 19）ものの、日常的視座の特殊認知形而上学においては必ずしもそうではない。たとえば、目で出来事を観測している時、光が届くのにかかる時間の分だけ過去の出来事を見ているという理解（マンフォード 2012/2017: 95）は、日常的視座においてはないだろう。形而上学が「科学と密接な関係をもつことは不可避」（鈴木他 2014: 20）という点は認知形而上学も変わらないものの、その関係は大きく異なるのである。

2.2.3　認知形而上学の立場

メタ形而上学と言われる形而上学についての考察が近年盛んで、たとえば、「私たちは形而上学的な問いを発するとき、何について話しているのか」（ジャッケンドフ 2012/2019: 209）ということが問われている。認知形而上学は、このメタ形而上学の問いに対して、私達の実在世界に対する理解、つまり「人の心はどのような種類の存在物を世界に登場させているか」（p. 209）について話をしているのだと考える。これは、「形而上学を、世界そのものについての探求というよりも、世界に関する私たちの思考がもつ構造の記述としてみる」という形而上学観である。カントが『純粋理性批判』で提示した形而上学（の可能な解釈の 1 つ、マンフォード 2012/2017: 166）に近く[13]、「われわれの概念構造のもっとも一般的な特色を明らかにすることをめざす」記述的形而上学（descriptive metaphysics）（ストローソン 1959/1978:

10）に属する。

このような立場の形而上学は、扱われる主題こそ従来の形而上学と共通するものの、形而上学が元来持っていた、実在世界全体に関わる深遠さが欠けているという不満が持たれることは当然考えられる。このような、「形而上学はたんに私たちが世界を記述する際に用いる諸々の概念や、それらの概念のあいだの関係に関する探究だ」（マンフォード 2012/2017: 166）という形而上学観には賛同しない形而上学者が多いようである。マンフォードによると、「形而上学者は、自分たちが問題にしているのは客観的で永久不変の真理なのであって、それは私たち人間のものの見方には影響されないのだ、という感覚を手放したくないのである」（pp. 95–96）。しかし、これは認知形而上学への批判としては的外れである。認知形而上学が解明しようとしているものは、古来の形而上学とはそもそも違って概念世界だからである。

この立場から従来の形而上学の議論を見ると、メタな視点から新たなことが見えてくる。これも一種のメタ形而上学と言えよう。以下ではその一端を提示する。形而上学の問題が語られるときに、以下のように視座について語られないままに、世界の理解という視座と不可分なものが語られることが多い。

> 私たちは、世界に存在するもののうち、どれがどれと同一のものであり、どれがどれと別のものであるかを理解し、そのことを前提にして生きている。逆に、もしあなたが世界にあるもののうちどれとどれが同一であるかをまったく理解していないとしたら、あなたは目の前の本とコップを区別することさえできないことになる。つまり、同一性についての事実は、それを前提しないことには、私たちが現にもっている世界のあり方についての理解が成り立たないようなものなのだ。（p. 7、下線は引用者）

「世界の基礎的な事実」（鈴木他 2014: 5）の方が「世界のあり方の理解の基礎になっている」（p. 6）とも述べられている。しかし、その理解もある視座からのものであることを忘れてはいけない。世界に同一性、因果、複数の対象が持つ共通の性質がなくとも、我々の今の理解が成り立たないだけで、世界は我々の理解とは違った形である、と理解可能だろう。人間以外の生物にとっての世界を思い描いてみるとよい。目の前の本とコップを区別できない生物は少なくないだろう。認知的視座からは、結局、形而上学は実在世界のあり方の問題ではなく、我々のある視座からの理解の問題だと了解できる。たとえば、同一性や因果性や共通の性質をもつことについての形而上学的問いが生じるのは、これらについて我々が「まだ確固とした理解をもっていないから」（p. 9）だと鈴木他は述べているが、我々は生まれ持った日常的視座からの無意識的理解に基づく行動を日々行っているのだから、これらの理解がその意味で「かなりあやふやである」（p. 9）とは言い難い。あやふやになるのは、1 つには日常的視座を培った日常的状況とは大きく異る状況になった場合である。

もう 1 つあやふやになる例を挙げよう。自由と決定論の問題として、「「私たちは自分の行為を自由に選びながら生きている」という理解と、「この世界の出来事は自然法則に従って

推移する」という科学的理解[…]を調停する」（p. 23）という課題が挙げられている。これはまさに前者の理解の基盤になっている日常的視座と、後者の理解の基盤になっていて、普段は行為の領域においては採用されない自然科学的視座の食い違いが引き起こしている問題である。この問題が解決可能かどうかは両者を元に新たな視座を作ることが可能かどうかによるだろう。なお、このような点について、現在のところ筆者は、次のように述べるジャッケンドフと同様、楽観的ではない。「視点を俯瞰する視点から考えると、すべてを包括するような、視点にしばられない〈世界についての真理〉は存在しないと認識することは大切である。私たちがこの世界に対して抱く疑問は、相互に矛盾しない答えの集合体へと一元的に収斂するわけではない」（2012/2019: 309）。形而上学の立場は、視座に関してこの問題以外にも、視座の複数性や通約（不）可能性を容認するかどうかによっても分かれることになる。

3　認知（メタ）形而上学の試み：普遍者をめぐって

最後に、RFT と認知形而上学から、コニー＆サイダー（2005/2009: 8 章）の普遍者に関する入門的な議論を例として、RFT・認知形而上学を前提としたメタな観点から形而上学についてどのようなことが言えるかを示す。まずは、RF のデータ構造を簡単に示しておく。RF は以下の 4 つの素性を持つ。RFT は、RF の認知形而上学を反映したデータ構造（本稿では紙幅の都合で詳述できない）によって、名詞句の意味の多様性を捉える。

- 存在論的範疇　モノ、コト、人、場所など、RF に対応する対象の存在論的範疇を表す。タイプ・トークンの区別がある範疇においては、[±token]によってそれを表す。
- ID　RF はワーキングメモリにその都度作られてはやがて消える。そのため、前にジョンについて話したときにジョンに対応した RF と、今ジョンについて話しているときのジョン RF が同じ対象に対応することを保証をする必要がある。それをするのが ID である。ID の値には定項 a b c、自由変項 x y z、null 値 ϕ　ϕ、束縛変項 α　β がある。非指示的とされる名詞句の多くは、定項以外の ID を持つ。存在論的範疇により同定のされ方は異なり、例えば、コトはその内容で、場所は指差し・座標等で同定される。
- 内容特徴　〈x が試合の勝者である〉〈a がボクサーである〉などの対象についての個別的知識がこれに含まれる。知識の更新とともに増減があるが、内容特徴が変わっても、同じ ID を持つ RF に対応するものは同じ対象とみなされる。[身長：2m]や[合否：合格]のような[特質：値]の形をとる内容特徴もある。それ自体 RF に対応しない特質・値に対応する名詞句「2m」等も、名詞句の説明に重要な役割を演じる。
- 位置付け　人間は、自分が現実世界の実態と考えるもの以外も理解できる。他人の心、フィクション、願望などである。内容特徴ごとに位置付ける必要があることもある。有標の位置付けを持つ RF によって、不透明文脈などの現象が説明できる。

以上のデータ構造は、進化的に言語に先立つ概念構造における区別であり、言語特有では

ない。その意味では、認知言語学のいう一般的な認知能力に含まれる。

3. 1　RF と内容特徴の区別

普遍者を考えるにあたって、RF とそれに含まれる内容特徴の区別をすることが重要である。たとえば、3 つのリンゴに共通する性質があることは、それぞれに対応する RF（ID a, b, c とする）に〈a/b/c がリンゴだ〉という内容特徴があることによって捉えられる。性質は、普段、内容特徴として現れる。コニー＆サイダー（pp. 226–227）が議論している電子の電荷と電荷量のように特質とその値として現れる内容特徴もある。

内容特徴自体は RF ではなく、RF に対応する対象と同じようには存在しないということが極めて重要である。性質という普遍者が存在するのかが怪しく思えてくるのはそのためだろう。しかし、性質も RF 化可能で、その RF に対応した名詞句を用いることで、その概念化を他人と共有することもできる。RF 化すれば、性質も概念世界においてリンゴと同じように存在するようになる。これは、「リンゴや電子には共通する「もの」がある。したがって、そういった「もの」、つまり、普遍者が存在する」（p. 230）という時にまさに我々がやっていることである。そして、そう言うと「なんだかうさんくさく聞こえる」（p. 229）のは、これまで対象ではなかったものがあっという間に対象化するからである。「いったん普遍者について考えはじめてしまえば、普遍者の存在を否定するのはむずかしくなる。」（p. 225）のは、それを主題として考える際に対象にしたために他ならない。

次の直観に反する帰結も、RF と内容特徴を区別していないことに由来する。

> ただ単にリンゴを「リンゴ」と呼ぶだけで、リンゴともうひとつの何かについて語っていることになるとは思えない。ところが、もし普遍論が正しければ、われわれはまさにそういうことをしていることになってしまう。リンゴと普遍者〈リンゴである〉について語っていることになるのである。だが、特に思い当たるふしはない。われわれがしていそうなことは、リンゴをリンゴとして分類していることだけだ。（p. 229）

RFT において「A について語る」というのは、A に対応する RF への情報の追加・削除が発話の中心的認知効果となるということである。そうだとすれば、普遍者である性質に対応する RF が関わっていて、それに対する情報の追加・削除が発話の中心的認知効果となっていなければ、それについて語っていることにはならない。3 つのリンゴの話をしているときに、普通、その内容特徴は RF 化されないから、普遍者について語っているわけではない。従って、「われわれはそうとは知らずに普遍者について語っているのかもしれない」（p. 229）というのは RFT 流に解釈すれば思い過ごしである。

3.2　RF 化による性質・関係の無限増殖

RF の内容特徴として捉えられる性質だけでなく、RF 間の関係も RF 化できる。そして、関係同士の並行関係のような高次のものも論理的にはいくらでも RF 化できる（pp. 237–238）。普遍論によると、幸せなあなたの周りには、下の図が示すようにたくさんの普遍者があり、増殖に終わりはない。

あなた♡性質〈幸せ〉
↑　←関係〈成立〉
関係〈例化〉↑　←関係〈？？〉
関係〈？〉　↑　←関係〈？？？？〉
関係〈？？？〉

あなたの幸せを祝福しに次々と駆けつける無限の普遍者達

あなたの幸せを祝福するために普遍者が一人また一人と来てくれているようにも見えなくはないが、認知的視座からは、関係を RF として概念化しようとすれば、いくらでもできるというだけのことである。関係達を RF 化しないとなると、「関係項に関わることなしに関係項どうしを関係づける、なんてことがどうしてできるのだろうか？」（p. 238）という問いが出るかもしれない。それができるのは、RF のデータ構造―ID や内容特徴を含む―が先立ってあるからである。そのために、関係自体が RF 化されずに関係項同士が関係づけられることが可能なのである。認知的視座においてはデータ構造が普遍者の代わりにあなたの幸せを保証してくれる。

3.3　普遍者の存在論的範疇

関係や性質を RF 化したと言っても、その存在論的範疇（これも RF のデータ構造の 1 つである）は、リンゴというモノの RF と同じではない。この違いを無視すると、「もしリンゴを見ているときに見ているものが普遍者[〈赤さ〉]の色だとすると、ほんとうはリンゴの色を見ているのではなく、リンゴの色の色を見ているのではないだろうか。だとすると、その色には色があるのだろうか？それともないのだろうか？」（p. 235、補足は引用者）という疑問が出てきかねない。この疑問を持つ人は、性質という普遍者の存在論的範疇を、おそらくもっとも典型的な存在論的範疇であるモノと同じと考えてしまっているのではないか。「赤さ」に対応する RF の存在論的範疇が性質だとしたら、その内容特徴には[色：赤]のようなものは入れない。赤が入るとしたら ID の値にであって、内容特徴に入れるのは、〈a が程度性がある〉のようなものである。

3.4　矛盾した内容特徴を持つ RF

〈自己例化しない（non-self-instantiation）〉という性質は、ラッセルのパラドックスを呼び

入れることによって普遍者一般の存在を脅かすことになる（pp. 239–244）。これについても一言述べておこう。この性質が自己例化すると考えてもしないと考えても矛盾に陥るため、次のように言われている。「この普遍者〈自己例化しない〉を思い浮かべることができないのである。なぜなら、そのような普遍者が存在することはありえないからだ」（p. 242）。しかし、そのような矛盾する性質を持ったものも概念化することはできるだろう。そうでなければ、〈自己例化しない〉についての議論が理解できないはずである。同様に、円い三角形も、形を思い浮かべることはできなくても概念化することはできる。もちろん、そのような RF に対応する対象が実在するかどうか（RFT 流に言うと、RF が現実世界の実態に位置付けられるかどうか）は全くの別問題である。「円い三角形」に対応する RF は、一貫した空間構造は持たなくても、概念構造においては、矛盾する二つの内容特徴を持つだけである。普遍者を外部世界に実在するものと考えず、概念的なものと考えるなら、〈自己例化しない〉という普遍者が存在しないとは言えないし、そこから矛盾が帰結してもその存在が禁止されるわけでもない。もちろん、実在の人物の RF に矛盾する内容特徴 2 つが入ったら、どちらかを削除しようと判断材料を集めたりしようとするだろう。それは生きていく上での都合によるものであり、RFT が強制することではない。

3.5　概念論としての RFT・認知形而上学

なお、RFT・認知形而上学は、普遍論争についてはメタな立場で論評するだけでなく、概念論の陣営で参戦することができる。概念論とは、「語に一般性を与えるのはわれわれの心の中のもの、つまり、概念であるという説」（p. 257）である。コニー＆サイダーは、ボートを例に次のように説明する。

> われわれのボートの概念はボートすべてに当てはまり、それ以外のどれにも当てはまらない。このように、この概念は一般性をもっているから、この概念を表す語として「ボート」を採用すると、この概念に埋め込まれている〈ボートに対して一般的に当てはまる〉という特徴がこの語に備わるのである。（p. 257）

概念論は、すべてのボートに共有される 1 つのものが存在すると認める必要はないため、それがどこにあるのかなどと問う必要はない。3 つのリンゴが共有している普遍者〈赤さ〉はどこにあるのかという問いに対しても、3 つのリンゴに我々が共通して見出した性質は認知的なもので、外部世界にあるものではないと考えるなら、問いはそもそも起こらない。その問いは、日常的視座にこだわった結果起こったもので、たとえば「赤いものがあるところには普遍者〈赤さ〉の全体が丸ごとあるというアイデア」（p. 233）は普遍者が外部世界にあるという日常的視座を拗らせてしまった結果にしか認知的視座からは見えない。

そもそも赤色が感じられることには普遍性は関係なく、赤錐体細胞の興奮によって、個別的なリンゴの色が知覚できるだけである。したがって、普遍者そのものに色があると考える必要はない。そして、3 つのリンゴそれぞれの個別的な色の見えを赤とカテゴリー化するの

も認知の作用である。「そもそも青いとはどういうことなのだろうか？」（p. 254）という問いにも、認知的視座からは青錐体細胞の興奮によるものという説明をすることになる。もちろん、クオリアについては説明したことにはならないが、その点においては、「ある対象が青いとは、ある存在者、つまり、普遍者〈青さ〉が存在し、問題の対象がこの存在者を例化するということである」（p. 255）といういかにも形而上学らしい説明も同様である。「青いとはどういうことかを完全に理解するためには、普遍者とされる存在者と例化関係についてもっと知る必要がある」（p. 255）とコニー＆サイダーは述べているが、それについては、既に RFT のデータ構造に基づく説明を与えた。そこから先は、青錐体細胞などに関する知覚の生理学と、クオリア問題にアプローチする諸学に委ねることになる。

概念論への批判として、「レッド・デリシャス種の三つのリンゴは樹で育ったという点で似ているという事実」（p. 258）の構成要素のどれについても、「心の中にあるとするのは誤りだろう」（p. 259）というものが挙げられている。認知的視座に立つ RFT においては誤りではない。「概念論では、リンゴはちゃんと心の外に置かれる」（p. 258）と述べられているが、認知的視座を徹底した概念論ではそうではない（本稿 1.1）。

「概念がどのように適用例を獲得するのか」（p. 259）という問題は、形而上学の問題ではなく、認知科学・発達心理学の問題である。また、ランダムな 3 つのものを指さして、「ブラーグ」という無意味語を適用しても、この手続きではブラーグの概念を獲得できない（p. 259）、少なくとも新たなものに適用できない点で青の概念とは異なる、ということも問題として述べられているが、その 3 つのものから認知システムにとって有意義な一般化が得られなければ、そのような概念を獲得しないとしても何も不思議なことはない。形而上学の問題であっても人間の心が関わるものである限りは、認知の研究との適切な分業・協力が不可欠だろう。

4　おわりに

以上本稿では、概念主義的意味論・RFT にとっての世界がどういうものであるか、それを探求する認知形而上学が RFT には必要であること、認知形而上学とはどういうものであるのか、そして、その視座に自覚的な特徴が形而上学に対して持つ意義を述べた。最後に、普遍者について RFT・認知形而上学が視座を俯瞰した視座からどのようなことを言えるかを議論した。（構成のアンチノミー（コニー＆サイダー2005/2009: 7 章）を例とした、同様の議論は山泉（投稿中）にある。）視座について自覚的であるという認知形而上学の特徴は、他の形而上学にも示唆を与えるものであり、日常的視座の世界を扱う特殊認知形而上学は、認知的でない従来の形而上学にも参考となる部分が少なくないだろう。

註　*本稿は、文部科学省の科学研究費（課題番号 : 17K17842、「コピュラ文名詞句の解釈多

様性を扱える認知語用論の構築」）の助成を受けて行われている研究の一部である。

[1] この場合には「X が Y を概念化する」という言い方は、Y が何なのかよくわからないから、語弊がある（田中太一、p.c.）。しかし、他に適切な言い方が思いつかないので、この言い方を続けることにする。

[2] 独り言のような聞き手のいない言語使用は確かに存在する。それにおいてはこの指示の規定をそのまま当てはめることはできない。そのような言語使用があっても、RFT は発生的観点を重視するため、(3)が根源的な言語使用において妥当である限り、これを基本に据えるべきであると考える。独り言の場合は、想起情報（スペルベル・ウィルソン 1995/1999）として自分にとって関連性のある発話をしていることが多いだろう。また、自分の心も大部分は意識できないものであるから、その際には他者の心の推測と同様に自分の心の推測も伴っていると考えられる。聞き手のいない言語使用は標準的関連性理論においても問題となるもので、RFT を発展させていく際の課題でもある。（こう考えるにあたって、戸田山 2014: 1 章の目的意味論についての議論を参考とした。）

[3] もっとも、概念世界の対象に RF が対応すると考えた方がわかりやすい場合はそのように述べることもある。なお、筆者には、このパラグラフの見解に哲学的な危うさが若干感じられる。概念構造の構造体と概念世界の対象にどれほどの差を認めなければならないかかが問題である。両者は、少なくとも対応関係があるものについては、概念部門における同じものを 2 つの見方から捉えたものではないか。概念世界も大部分意識できず、RF も概念世界の対象も、可能な状態の組み合わせ空間の総体における 1 区画（a location or region in the total combinatorial space of possible states, instantiated in a brain, Jackendoff 1992: 8.2。山泉 本巻: 2.3）と考えられる。本文で述べたのは、まずは作業仮説として差はないと考えてみるということである。もっとも、両者が同一であるという見解を撤回しても、RFT の残りの主張は維持できると思われる。

[4] フレーゲの意義≒提示様態は記述的と解釈されるのが普通（Pagin 2013: 135）である一方、Recanati（2013, 2016）の mental files は非記述的提示様態である。RF は mental files と同じようなものと思われるかもしれないけれども、提示様態ではないので、明々白々に異なるものである。

[5] 心理主義（mentalism）と認知的視座の異同について、両者は問題領域が違い、対立するものが異なると考えておく。心理主義は主に行動主義に、認知的視座は主に日常的視座に対置される。本稿は他の点で両者を区別しない。

[6] ジャッケンドフ（2012/2019）は認知的立場を最初に、「「脳から見る」という立場」（p. 2）と言って導入しているが、これは神経的視座と紛らわしい。

[7] 概念についての様々な見解は三木（2014）を参照。

[8] ここでの推論（inference）は、三段論法のように演繹されるものに限らない（Mercier and Sperber 2017）。

[9] 従来の認知意味論においても、認知形而上学は必要とされていたはずだけれども、日常的視座からは世界がどのようなものかは一見するとよく考えるまでは明らかとされているからなのか、あまり自覚的に研究されていたようには思えない。

[10] 合成的な形式意味論と対になる形而上学としては自然言語存在論（natural language ontology, Moltmann 2017, 2019, 2020）がある。自然言語に反映されている認知存在論が主題であると言われているものの（2020: 330）、前提とする意味論が全く異なるために、大きく異なる存在論が展開されている。

[11] クリプキ（1972/1985）の有名なゲーデル／シュミットの例のような場合の判断は、地域

差が見られた（Machery et al. 2004。Hansen 2015 も参照）。
[12] このあたりの科学との距離感は、マンフォードのような分析形而上学者と自然主義形而上学者では大きく異なるようだ（Ivanova and Farr 2020: 448）。形而上学と認知心理学の関係についての認知的視座からの考察として、Scholl（2007）を参照。
[13] カント哲学とジャッケンドフの概念意味論の関係は Jerzykiewicz（2003）に言及がある。

参 考 文 献

Culicover, P. W. and Jackendoff, R. 2005. *Simpler syntax*. Kindle edition. OUP.

Hansen, N. 2015. Experimental philosophy of language. *Oxford handbooks online*. DOI: 10.1093/oxfordhb/9780199935314.013.53

Ivanova, M. and Farr, M. 2020. Methods in science and metaphysics. In R. Bliss and J. T. M. Miller (eds.), *The Routledge handbook of metametaphysics*, pp. 447–458. Routledge.

Jackendoff, R. 1992. *Languages of the mind.* MIT Press.

Jackendoff, R. 1996. *The architecture of the language faculty.* MIT Press.

Jerzykiewicz, L. 2003. Toward a Kantian defense of Jackendoff's psychologism. *Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 25*, p. 1359. https://escholarship.org/uc/item/7zn4j7s8

Machery, E., Mallon, R., Nichols, S. and Stich, S. P. 2004. Semantics, cross-cultural style. *Cognition* 92, B1–B12.

Mercier, H. and Sperber, D. 2017. *The enigma of reason*. Kindle edition. Penguin Books.

Moltmann, F. 2017. Natural language ontology. In *Oxford research encyclopedias: Linguistics*. OUP.

Moltmann, F. 2019. Natural language and its ontology. In A. I. Goldman and B. P. McLaughlin (eds.), *Metaphysics and cognitive science*, pp. 206–232. OUP.

Moltmann, F. 2020. Natural language ontology. In Ricki Bliss and J. T. M. Miller (eds.), *Routledge handbook of metametaphysics*, pp. 325–338. Routledge.

Pagin, P. 2013. The cognitive significance of mental files. *Disputatio.*V(36): 133–145.

Recanati, F. 2013. *Mental files.* OUP.

Recanati, F. 2016. *Mental files in flux.* OUP.

Scholl, B. J. 2007. Object persistence in philosophy and psychology. *Mind & Language*, 22(5): 563–591.

Wilson, D. and Sperber, D. 1993/2012. Linguistic form and relevance. In Wilson, D. and Sperber D. (Authors), *Meaning and relevance*, pp. 149–168. CUP.

青山拓央. 2012/2014.『分析哲学講義』Kindle 版. 筑摩書房.

クーン，トーマス. 中山茂訳. 1970/1971.『科学革命の構造』みすず書房.

クリプキ，ソール. 八木沢敬・野家啓一訳. 1972/1985.『名指しと必然性』産業図書.

ケーガン，シェリー．柴田裕之訳. 2012/2019.『「死」とは何か』[完全翻訳版] 文響社.
コニー，　アール・サイダー，セオドア．小山虎訳. 2005/2009.『形而上学レッスン』春秋社.
ジャッケンドフ，レイ．郡司隆男訳. 2002/2006.『言語の基盤』岩波書店.
ジャッケンドフ，レイ．大堀壽夫他訳. 2012/2019.『思考と意味の取扱いガイド』岩波書店.
鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛. 2014.『ワードマップ 現代形而上学』新曜社.
ストローソン，P. F. 中村秀吉訳. 1959/1978.『個体と主語』みすず書房.
スペルベル, D.・ウィルソン, D. 内田聖二他訳. 1995/1999.『関連性理論』（第 2 版）研究社.
ソシュール，フェルディナン・ド．町田健訳. 1916/2016. 『新訳 ソシュール 一般言語学講義』 研究社.
チョムスキー，ノーム．福井直樹・辻子美保子訳. 1965/2017.『統辞理論の諸相』岩波書店.
戸田山和久. 2014.『哲学入門』筑摩書房.
ドネラン，キース．荒磯敏文訳. 1966/2013.「指示と確定記述」松阪陽一編訳『言語哲学重要論文集」pp. 91–129. 春秋社.
仲宗根勝仁. 2016. 「意味論的内在主義の擁護に向けて」『メタフュシュカ』47: 35–48.
フレーゲ，ゴットロープ．野本和幸訳. 1892/2013. 「意義と意味について」松坂陽一編『言語哲学重要論文集』pp. 5–58.春秋社.
マイノング，アレクシウス．三宅実訳. 1904/1930.『對象論に就いて』岩波書店.
マンフォード，スティーヴン．秋葉剛史・北村直彰訳. 2012/2017.『哲学がわかる 形而上学』岩波書店.
三木那由他. 2014.「概念の構造とカテゴリー化」信原幸弘・太田紘史編『シリーズ 新・心の哲学 I 認知篇』pp. 31–72. 勁草書房.
ミラー，アラン・S.・カナザワ，サトシ．伊藤和子訳. 2007/2019.『進化心理学から考えるホモサピエンス』パンローリング.
山泉実. 本巻.「指示参照ファイル理論序説」『日本語・日本文化研究』30. 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻.
山泉実. 投稿中.「視座を俯瞰した認知メタ形而上学の試み」
山田友幸. 2002.「行為としての言語」野本和幸・山田友幸編『言語哲学を学ぶ人のために』pp. 176–197. 世界思想社.
ラッセル，バートランド．松阪陽一訳. 1905/2013.「指示について」松阪陽一編『言語哲学重要論文集』pp. 59–88. 春秋社.